

「真実と偽り」

～ポスト トゥルースに注意 メタノイアの道6～

ルカ23：27～34

■ ホストトゥルース

ホストトゥルースという言葉を知っていますか。最近イギリスがユーロを離脱したり、アメリカでも本来勝つはずでない大統領が選ばれたりといったことが起きています。なぜこのようなことが起きるのでしょ。現実には大変なことになるの。それは、ホストトゥルースが起きたから。ホストトゥルースとは、「真実の後」という意味で、世の中が、何が真実なのかでなく、感情や個人的信念により動いていくことを指すのだと言います。人には良心があります。そして本来、自由の決断を良心によって成すはずなのです。しかしそれができなくなっています。外部から入ってくる言動や感情によって、変わってしまうという恐ろしさがあります。ホストトゥルースとは自らを失った社会です。これは最近では同情にも起こっています。イエス様が十字架にはりつけになるために丘に向かって体中傷だらけで引かれていた最中、イエス様を信じて涙ながらに走り寄った人たちに、イエス様が語った言葉は「泣くな、私のために泣かなくてよい。」でした。情で走り寄っていったのは、神様は私たちの心にすばらしい心を与えました。ところがその心に基づいて正しく行動しているつもりだった彼女たちは、イエス様は「NO!」と言われたのです。「子どもを生まなかつた親が幸せだという時代がこれからくるんだ、そのために泣きなさい。」と言われたのです。今がその時です。親が子どもを持つということは非常に不安でしょう。学校に行かせるのも不安でしょう。なぜなら、そこで正しいことが行われるかどうか分からないから。痛ましい事件がそこら中で起こっています。私たちの心の良心は何処に行ったのでしょうか。人と接するときのように向き合っているか、そして本来どうあるべきかそれを考えてみてください。私たちは聖書の中で罪人だとされます。なぜなら外的を外しているからだと言われます。「メタ」とは〇〇の後、「ノイア」は視点・考えや思いを表します。すなわち「メタノイア」の直訳は、視点・考えを後で変える、思い直すという意味です。なぜ教会に来るのか、それは普段考えないことを考えなければならぬからです。私たちは、何も考えないで生活していると、何が的外しているかも分からなくなってしまう。良心と感情のせめぎ合いによって起こったいざこざです。見るべき真理から違うものを見ていたからです。聖書の原点は、根本解決です。あなたの人生は、対処的解決ですか？根本解決ですか？情は、その真実の愛がなければならぬのです。愛とは、親が子を愛する愛に近いと聖書では言っています。我が子が間違っているときに、親は対処療法ではなく、二度としないように考えるでしょう。根本的解決をするために親は向き合うわけです。ところが私たちは、目の前にある事象に対して同情心から人々に向き合おうとします。

■ 人生の真実に向き合う

あなたの中にある真実と偽りについて、私たちがどう向き合うかを考えないといけません。偽りは、私たちの人生にいつも関わってやうとします。人生の真実と向き合わなければならないということ、大きなテーマです。イエス様は十字架にかかるときに、自分に同情を向けてくる人たちにどう関わったのでしょうか。彼の人生の真実は、自らを犠牲にして生きるという生き方でした。十字架にむかう時でも、人生の真実に向き合おうとしました。本来の神様との関係というのは、私たちの心の思いが、神様に帰る瞬間なのです。あなたを愛してくれる人の愛を知ったときに愛によってその愛にこたえようとする、その関係です。これは宗教の話として聞かないでください。言われたことを何か実践することで、何かによって愛され、利益を得られるような下らないことではなく、あなたが本来のあなたとして生きるために命をかけた事件があったことなのです。あなたの本来が、本来たるところに行かないがゆえに、命をかけたという歴史があるのです。その人は人生と向き合いました。イエス様がなぜ十字架にかかったのでしょうか。彼が十字架にかかってイエス様の十字架の横にかけられた2人の罪人に言った言葉は何だったのでしょうか。7つの言葉があると言われますが、最初に言った言葉は「彼らは何をしているのか分らない。彼らをゆるしてください。」でした。人は苦しいのどん底に落ちた時、自分を正当化する言葉が出てきます。しかしイエス様は私のために泣くな、彼をゆるしてくださいと言いました。アダムとイブが罪を犯したとき、アダムは、謝る事が出来ず、「あなたをつくった女が食べたから食べたんだから何が悪いんですか。私が悪いんじゃない、この女が悪いんです。」と言ってしまいました。私たちの心の中にはいつも、いつ裏切られるかという潜在的なおそれがあります。だから根本解決に向かう道は、私たちの中でおそれです。人と向き合うのは楽しいですか。何かのせいにしておけば楽です。しかし、イエス様は十字架の上でその道を選びませんでした。彼の思いは最期、自らの人生の使命に戻ったのです。彼は自分の人生に向き合ったから、すべての

人が神から見捨てられる痛みを彼一人が背負わなければならないという強い信念があったので、人々の言葉の代償として彼が十字架で背負って語ったのです。だから彼は進んで十字架に手を差し伸べていきました。手にくいを打たれたときの痛みは愛でした。あなたを愛するがゆえの十字架の彼のミニストリーは、人生に向き合うと言う、大きな賭けだったのです。逃げるなど伝えるために、彼は、あなたの人生に向き合ったのです。目の前で何かが起きると逃げたくなります。向き合うと、被害を被るかもしれません。しかし、彼は逃げない道を、あなたに模範として示しました。今日自分の人生に向き合うことを決断しましょう。過去を思い返しみてみてください。どんな記憶があなたの中に残っていますか。大概被害にあった記憶です。私たちの過去の記憶は、あなたの人生で間違った記憶や置き換えた記憶に変えられていきます。なぜならその時に悩み、怒ったり苦しかったりしたことを解決していないからです。頭では解決したつもりになってしまいますが、ふたを閉めて忘れていただけなのです。記憶の中にはちゃんと残っていて認識しています。つながっていないので、その記憶をある時突然思い出すのです。誰かと出会ったときに過去の記憶が出てきては、あなたの考えを覆してしまいます。本来あなたが選ぶべき記憶でないことをさせるのです。私たちの記憶はそうにして、その人をイメージづくりまします。イメージづかったものと真実や心理はどうかというものを考えなければならぬ。あなたがとっている行動や今起きている問題、あなたが今直面している現状を偽って記憶していきまします。そして絶えず人のせいにします。本来それが問題と分かっているけれど対処療法をしてしまいます。それと向き合っても解決はありません。あなたはどこへいっててもその問題と向き合うことになってしまいます。だからイエス様はあなたがそれと向かい合わなくてよいように十字架にかかることを決意したのです。

■ 私の羊を牧しなさい

私たちがなぜ人のせいにするのでしょか。イエス様の弟子たちが最後の晩餐のときにどんなことをしたのでしょうか。あなたはどの弟子に似ていますか。イエス様はペテロに1対1で向き合いました。そして真髓のところまで戻ったのです。人生とは向き合うことです。私の羊を牧しなさいとは、向き合うことです。許すとは、向き合うことです。過去の記憶の中から解決をし、憎しむ人を許すという決断をしなければなりません。自己防衛ではなく、丸腰で向き合えばよいのです。心を開いて向き合う、その道に進まれたのがイエス様です。イエス様は裸であざけり者として、十字架にかかっていきました。あなたが憎しみを着たままでこの道を進むことはできません。憎しみの服は人々を傷つけるだけです。過去の記憶を持ったまま、整理をしないままでは、その傷から出る言葉で人を傷つけまします。そんなつもりがなくても、その人を解決してあげることはできません。優しくしてもその人は悪くなっています。なぜなら愛ではなく情だからです。情で人を変えることはできません。一時心を楽にすることができてもまた戻ります。何かに依存しても何も変わりません。あなたの価値観もものごとを判断して、間違った見方で人を育てようとしてまします。あなたの間違った価値観を祈りに変えましよう。あなたのために命をかけた人は、あなたの人生に変化をもたらせたかったのです。あなたが何をを選ぶかです。あなたの良心に聞いてみてください。あなたは素直に決断する人なのか、それとも頑なな道を選ぶのか、否定する人になるのか、そのまま対処療法で生きるのか、それとも神の道に近づくことが出来るのか。

■ ボンヘッファー

ヒトラーに捕らえられた牧師のボンヘッファーは、獄中の人々に向かって祈り、「これが最後です。私にとっては命の始まりです。」という言葉を残して殉教しました。獄中で彼の祈りによって沢山の人が救われたのです。彼は一粒の麦になってそこで死にますが、彼の祈りは多くの人の励ましとなりました。みなさん自分の過去の解決のために祈ってください。それがイエスターです。あなたの周りに病んでいる人がいます。その人を憎しんでいるなら、愛し許して祈ってください。私の罪のために許して下さったイエス様の愛のゆえに、私の過去を断ち切って過去の記憶を作り変えてください。あなたの記憶は変えられて病は癒され、新しい人生の始まりとなります。そして、人々に継承されていきます。それがこの聖書の教えなのです。

(要約者: 浅野 恵子)

(4月16日)